

＜属性＞ (guṇa) のハタラキとは何か

——バルトリハリの＜属性＞定義に見られる ‘savyāpāra’をめぐって——

小 林 芳 恵

バルトリハリは *Vākyapadīya* の第三巻「Guṇa の章」の冒頭で＜属性＞ (guṇa) を次のように定義している。

samsargi bhedakaṃ yad yat savyāpāraṃ pratiyate /

guṇatvaṃ paratantratvāt tasya śāstra udāhṛtam // VP3.5.1 //

「結合関係にあり (samsargin), [自己の関係項である＜実体＞を他の＜実体＞から] 区別し (bhedaka), ハタラキを持つ (savyāpāra) と理解されるものは何でも, 他に依存するもの (paratantra) であるから＜属性＞ (guṇa) である。このことは文法学において例証される。」

これから＜属性＞の特徴として次の四つが知られる。すなわち, 結合関係にあること, 自己の関係項である＜実体＞を他の＜実体＞から区別すること, ハタラキを持つこと, 他に依存することである。さて, ＜属性＞の特徴の一つとしてハタラキを持つことが挙げられている。＜属性＞は区別するものである。したがって, ＜属性＞のハタラキとして第一に考えられるのは, 差異化のハタラキであろう。その場合, ‘savyāpāra’ の意味は, 「差異化のハタラキを持つもの」である。しかしながら, このことは, 同じく＜属性＞の特徴として挙げられている ‘bhedaka’ によって含意されうる。それでは, なぜバルトリハリは, ‘savyāpāra’ をわざわざ＜属性＞の特徴として言及したのであるのか。従来の研究では, バルトリハリが＜属性＞の特徴として ‘savyāpāra’ と明言していることの意義について, 十分に明らかにされているとは言い難い。本論文の目的は, まさにこの点を明らかにすることにある。

当該の ‘savyāpāra’ に対してヘーラーラージャは次のように注釈している。

Helārāja on VP3.5.1: anena cāvachedyād dravyād avacchedakatvena guṇasya viśeṣam āha -- savyāpāraṃ, avacchedakarūpeṇa pratiyamānam guṇavyapadeśyaṃ na rūpāntareṇety arthah /

「さらに, こ [のカーリカー] を通じて [バルトリハリは,] 限定するもの (avacchedaka) としたの＜属性＞と限定されるもの (avacchedya) としての＜実体＞との違いを ‘savyāpāra’ と述べている。限定するものとして今現に知られているものが ‘guṇa’ と呼ばれるべきであり, そうでないものとして [知られているものは ‘guṇa’ と呼ばれるべきではない,

という意味である。」¹⁾

ヘーラーラージャが、上記において＜属性＞のハタラキを差異化のハタラキと理解していることは言うまでもない。彼は、‘savyāpāra’の意味を、「限定するものとして今現に知られているものが‘guṇa’と呼ばれるべきである」と説明し、バルトリハリが‘savyāpāra’と言及した意図を、「限定するものとしての＜属性＞と限定されるものとしての＜実体＞との違い」を述べるためであるとしている。

種々の語意が結合関係を本質とする文意から互いに結合状態にあるものとして抽出され、抽出された語意間には限定関係が認められる。我々は、それら諸関係項に、区別するもの、あるいは区別されるものという様相を見出して、それらに＜属性＞あるいは＜実体＞という規定を与える²⁾。したがって＜実体＞や＜属性＞という概念はあくまで相対的なものである。ある場合に＜属性＞と見なされていたものが、別の場合には＜実体＞と見なされることもあれば、ある場合に＜実体＞と見なされていたものが、別の場合には＜属性＞と見なされることもある。それゆえ、文意から抽出された諸関係項はいずれも区別するもの、すなわち＜属性＞、あるいは区別されるもの、すなわち＜実体＞と見なされうると言える。

そして＜属性＞概念の相対性は、ハタラキを持つか否かという視点からより明確に捉えることができる。ハタラキを持つか否か、すなわち、ハタラキが今現に発揮されているか否かという視点は、バルトリハリが kāraka 理論の枠組みの中で明らかにした＜能力＞の潜在性という視点と同じである。＜能力＞には二つの状態が考えられる。一つは、ハタラキが発揮されている状態、すなわち＜能力＞が＜行為主体＞によって具体的な使用の場におかれ活性化している状態であり (vyāpārāveśa), もう一つは、ハタラキが発揮されていない状態、すなわち＜能力＞が単に潜在しているに過ぎない状態である (yogyatāmātra)³⁾。例えば、鎌には何かを切断する＜能力＞が認められる。その鎌が実際に草などを刈ることに使用されている場合には、その鎌は自身のハタラキが発揮されていると理解されるが、一方その同じ鎌が納屋などにしまっている場合には、その鎌は自身のハタラキが発揮されておらず、その＜能力＞は潜在していると理解される。文意から抽出された諸関係項は、いずれも差異化の＜能力＞を持つものである。そして、差異化の＜能力＞を潜在的に持ちうる諸関係項のうち、今現にハタラキが発揮されていると知られているものが区別するものとして＜属性＞であり、一方そのハタラキが発揮されていないと知られているものが区別されるものとして＜実体＞である。このように、差異化の＜能力＞を潜在させている諸関係項に対して、今現にハタ

ラキが発揮されているか否かに応じて、＜属性＞概念が相対的に適用されるのである。ヘーラーラージャが ‘savyāpāra’ を説明して「今現に限定するものとして知られているものが ‘guṇa’ と呼ばれるべきである」と述べたのは、今現に差異化のハタラキが発揮されていると知られているものこそが ‘guṇa’ と呼ばれるべきであるという点を考慮したのであると考えられる。

それでは、バルトリハリが ‘savyāpāra’ と言及した意図は何か。ヘーラーラージャを考慮すれば、次のように考えられよう。＜属性＞と見なされるものも＜実体＞と見なされるものも、潜在的に差異化の＜能力＞があることについては同じであるが、両者はそのハタラキが今現に発揮されているか否かという点では異なる。これは逆の言い方をすれば、文意から抽出された諸関係項は、差異化のハタラキが今現に発揮されていると知られたならば、いずれも＜属性＞になるということである。バルトリハリは＜属性＞定義中に ‘savyāpāra’ と言明することで、＜属性＞概念の相対性を明らかにしているのである。我々には実に多種多様な言語表現を為すが、それらの一つ一つを＜属性＞概念や＜実体＞概念によって分析することができるのは、それら＜属性＞概念や＜実体＞概念がその場その場に応じて、相対的に適用されるものであるからこそであると言えよう。そして、＜属性＞定義中に見られる ‘bhedaka’ と ‘savyāpāra’ の違いについても、次のように考えられる。‘bhedaka’ は＜属性＞と呼ばれるものに備わっている根本的な特徴であり、第一に挙げられるべきものである。一方、‘savyāpāra’ については、差異化のハタラキは諸関係項がいずれも発揮しうるものであるから、自身のハタラキが発揮されているか否かという様相を提示しているものである。

《結語》 バルトリハリの＜属性＞定義に見られる ‘savyāpāra’ (「ハタラキを持つもの」) とは具体的に言い換えれば「差異化のハタラキが今現に発揮されているもの」である。文意から抽出された諸関係項はいずれも、差異化の＜能力＞を潜在させている。そして、それら諸関係項に対して、ハタラキが発揮されていると知られるのに応じて、＜属性＞概念が相対的に適用される。バルトリハリが ‘savyāpāra’ と言及した意図はまさにこの点にある。

[略号・参考文献] Helārāja: *Prakāśa* on VP ed. by K. A. S. Iyer. LM: *Laghumañjūṣā* ed. by Madhava Śāstri Bhandari. Uddyota: *Mahābhāṣya* ed. with *Pradīpa* and *Uddyota* by Vedavrata. VP: *Vākyapadīpa* ed. by W. Rau. Ogawa [1997] “Pāṇiniyas on *Yogyatā* and *Śakti*”. (『印度学仏教学研究』46-1) 小林 [1999] 「バルトリハリ言語哲学における＜実体＞と＜属性＞」

『哲学』51 広島哲学会)

- 1) ナーゲーシャが *Laghumañjūsā* において、当該カーリカーを引用の上、注釈している。彼の解釈はヘーラーラージャと同様である。LM1551,10-11 savyāpāram avacchedakatvena pratiyamānam / tenāvacchedyadravyanirāsaḥ / (「savyāpāra (「ハタラキを持つもの」) とは限定するものとして今現に知られているものである。したがって、限定されるものである<実体>とは反対のものである。)」さらに、彼は *Uddyota* においては、カイヤタによって引用される当該のカーリカーを注釈しながら、‘savyāpāra’ に対して上記とは異なった説明をしている。Uddyota on P2.1.1: savyāpāram iti / svaviśayaśaktigrahaṇe svāśrayopasthāpakatvarūpavyāpāravat ity arthah / svāvacchinnatvena sakalavyaktyupasthāpakatvavyāpāravat ity artho vā / (「‘savyāpāra’ (「ハタラキを持つもの」) に関して、第一解釈：自己を対象とする<能力>の理解時に、自己の基体を想起せしめるものとして「ハタラキを持つもの」であるという意味である。第二解釈：自己によって限定されるものとしてのすべての<個物>を想起せしめるものとして「ハタラキを持つもの」であるという意味である。)」 ナーゲーシャは二通りの解釈を示しているが、どちらの解釈であっても、<属性>のハタラキとして<属性>自身の基体である<実体>を想起せしめるハタラキが理解されよう。このナーゲーシャの解釈は、当該カーリカー中に見られる ‘bhedaka’ と ‘savyāpāra’ とに別々の意義を見出そうとするものであると考えられる。
- 2) <実体>と<属性>の位置づけについて、詳しくは小林 [1999] 参照。
- 3) ‘yogyatā’ については、Ogawa [1997] 参照。

<キーワード> バルトリハリ, guṇa, vyāpāra

(広島大学大学院)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (4)

年代考——Jayanta と Vācaspati の先後関係をめぐって——

丸井 浩 (東京大学)

Nyāyasūtra II. 2 研究

室屋安孝 (日本学術振興会)